

安楽寺寺報

開光

第84号
第 8 4 号
第 8 4 号
2017/8/1

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

少欲知足

信楽晃仁



その功德によつて母親は救われたのでした。このような物語が元となり、日本全国

お盆と言えば、ご存じの通り『孟蘭盆経』というお経に由来します。そのお経には、目連尊者とお母さんの物語が

先日、高校の時の友人の結婚式に初めて出席しました。初の結婚式出席で興味津々でしたが出席して、僕は結婚式がこんなにも参列者に感動を与えるものなのか、と驚きました。それとともに「結婚」ということについて改めて考えさせられました。

結婚について

信楽慧



先日、高校の時の友人の結婚式に初めて出席しました。初の結婚式出席で興味津々でしたが出席して、僕は結婚式がこんなにも参列者に感動を与えるものなのか、と驚きました。それとともに「結婚」ということについて改めて考えさせられました。

結婚することによって二人は家族となります。しかし元々二人は赤の他人です。その赤の他人が結婚によって、その他人に信頼を置き、責任を負うことになるわけです。僕は家族には無条件の信頼があるものだと思っており、それこそが、親から子、子から親への愛情だと思っています。それは、僕が生まれた時から家族がいて、変わらぬ愛情を注いでくれた歴史があるからだと思います。しかし、結婚をすることで「家族」となる場合は今まで他人だった人に対して無条件の信頼を寄せることとなります。僕はその時、無条件に信頼することが出来るだろうか、責任を負えるだろうか、と考えてしまいました。僕は、家族以外の他人に対して、この無条件の信頼を寄せるということができれば、それは素晴らしいことだと思います。しかし逆にそれはとても難しいことだとも感じました。皆さんはどうなのでしょう。今回結婚ということの素晴らしさとともにその重さも感じた結婚式でした。

安楽寺本堂外壁修復事業

いつも安楽寺の護持運営にご協力を頂きありがとうございます。そうした中、大変恐縮なのですが、近年安楽寺本堂の外壁の破損が多数見られるようになりました。現在総代会並びに専門業者にも入ってもらい協議をしています。今後何等かの方針が決まりましたら、また改めて詳細を含めてご案内をさせていただきます。ご心配並びにご迷惑をおかけ致しますが、何卒宜しくお願い致します。

安楽寺マンガ通信

との35 信楽めぐみ作

七月初めに人生で初めての結婚式に呼ばれました。



高校の時の一番仲のいい子だったのよ、いつも感動したよ。



友人代表のスピーチもさせていただきました。これも初めての体験です。緊張しましたが、こんな大役に挑戦してくれてすごく嬉しかったです！

これから幸せな家庭を築き上げて欲しいわー！



すっごく綺麗で幸せな結婚。いいなあと思いました！

私もいつか、漫画通信で結婚のお話を聞きたいわー！



十年來の友達なので時の流れが、すっごく早く感じました。

編集後記

今回、兄妹が揃って、七月にそれぞれの友達の結婚式に招かれ、結婚式デビューしました。私も六月に二件安楽寺南組寺院の結婚式がありました。結婚式続きですが、新しい家族が増えるということ、どこも「お祝いムード」です。さて、こうした結婚式を若い二人がどう見たのか親としては気になる場所です。二人とも感動したと言っていました。結婚に結びついてくればいいのですが、とはいっても、ご縁事でもありません。まだ若く二人です。油断してるとあつと言つ間に時間が過ぎますが、油断せず、話があればと思つ今日この頃です。ご笑覧ください。合掌

にお盆が広がり、先祖供養という形が残りました。私たちもお盆ともなれば、故郷に帰り、お供えや盆灯籠を持って、お墓にお参りします。しかし一つ気をつけておこなうてはならないのは、その表面的な表現だけで、先祖供養をするならば、それは大きな間違いです。親鸞聖人も「無戒名字の比丘なれど 末法濁世の世となりて 舍利弗・目連にひとしくして 供養恭敬をすすめしむ」と正像末和讃に悲歎されています。私たちが学ばなければならぬことは、先祖供養ではなく、その前に、

なぜ目連尊者のお母さんは餓鬼道に落ちたのかと言う事が問題なのです。そもそもこの孟蘭盆経の物語自体、お母さんが餓鬼道に落ちていなければ成立しなかつた話です。全てそこから始まっています。ではなぜ優しかったお母さんが餓鬼道に落ちたのか。それが一番の問題です。餓鬼道とは我欲に従つた生き方をしたものが落ちる地獄です。それを經典には、親が、特に母親が子どもを育てるには、我が子可愛さの余り、悪業をも辞さぬ迷いの母心を持つのだと書かれています。自らは地獄に落ちようとも、この子の為にと心が働くのだとあります。特に、今のように子どもが元気に育つことが当たり前ではなかつた時代の母親の思いというのは、

願うところが、時として悪業となつたのかも知れません。七五三という習慣も、どうか三歳まで、イヤどうか、五歳まで、七歳まで元気でいてくれれば、という親の痛切な願いが残つた習慣です。 そうした親の心や、恩に触れればこそ、感謝の思いを持ち、先祖や、親の命日をご縁に、法要をお勤めして、皆が幸せになれる、まことの仏教の智慧の教えを、我が聞き、子や孫に伝えていく。そうしたご縁の一つがお盆の行事です。 そういう意味でこの孟蘭盆経にでてくる、目連尊者のお母さんは子煩悩で、我が子目連が可愛くて可愛くて、言つてみれば過保護といわれる

「一枚の写真」 大原三千院の 往生極楽院の 前にある苔むした庭の一角に たたずむ「わらべ地蔵」です。 長い年月を過ごした証に、苔 と一体になった可愛い姿が数 体見え隠れします。色々な表情があり、いつまで見ても飽きない雰囲気があります。是非お訪ねください。

育つことが当たり前ではなかつた時代の母親の思いというのは、



「一枚の写真」 大原三千院の 往生極楽院の 前にある苔むした庭の一角に たたずむ「わらべ地蔵」です。 長い年月を過ごした証に、苔 と一体になった可愛い姿が数 体見え隠れします。色々な表情があり、いつまで見ても飽きない雰囲気があります。是非お訪ねください。



ほど大切に育てたのかも知れません。それが餓鬼道落ちを招いたのかも知れません。

いとわつゆも思いはしないのです。結局その娘に対する愛情は、カホコの成長を妨げ、子どもの為にはなりません。そのみならず親も子離れできない事に気づいていないのです。そういった内容をコミカルに描いたドラマです。

水曜日の夜「過保護のカホコ」というドラマがあります。このドラマの主人公は大学四年生のカホコ。就職活動の真つ最中。しかし親の過保護の中で育ったことで、何事も親任せ、何一つ自分で決められず、自分だけでは何もできない女の子です。当然就職も決まらず、一生懸命やっているのですが、どうもうまくいきません。ふとしたきっかけでカホコは全く対照的な生活を送ってきた同級生の男の子と出会います。その男の子はカホコに「おまえのような過保護が日本をダメにするんだ」と言いつつも、見るに見かねてカホコに色々な事を教えてくれるのです。そんな中でだんだんとカホコも成長し、社会を知り、親離れをしていく、そんなドラマです。しかし黒木瞳ふんする母親は、一心に娘カホコの為と思いい、何でも先回りし、何でも与え、過保護な生活を与えるのです。それが娘の為にならな

カルに描いたドラマです。このドラマを見ていても、子どもの為に良かれと思う親心が、決して無条件に肯定されるのではなく、その愛情を思わずにはおられません。孟蘭盆経の説く世界は、昔の話し、ただのお話ではなく、私たちの今の現実の話なのです。過保護は言い換えれば、過剰な親の愛情表現です。それは確かに我が子が可愛いという親心に間違いありませんが、その奥にはその我が子よりも、自己中心的な親の我愛も見え隠れします。それは無智とも言えます。智慧の眼で見れば、親鸞聖人が「厳父の如く、慈母の如し」と言われたように厳しさと優しさのバランスが必要で、癒やしばかり、優しいばかりでは、人は育たず、結局自立ができません。後で泣くのは当の本



今年、猛暑も過去最高です。日本だけでなく世界で異常気象です。環境破壊がすすみ、地球がSOSを発信しています。なぜこのようなことになったのかといえば、その原因は私たち人間です。人間が科学技術によって自分たちの快適さと利便性をどこまでも追求し続けた結果がこの地球のSOSです。この猛暑の中私たちは家の中でクーラーに浸かります。車の中でも快適な空間を確保します。しかしその代償として室外機や車からは5〜60度の高温の排気を行っています。赤道直下が50度だそうですから暑くなるのは当然です。涼しさを求めながら、地球を暑くしているという矛盾を抱えているという生活しています。えながら生活してしまっています。それだけではありません。その快適性の追求という身体への過保護は、私たちの身体にも副作用を

与えます。熱中症はクーラー病だといわれます。暑いから熱中症になるのなら、高校球児も、赤道直下の国の人も皆熱中症にならなくてはなりません。クーラーに当たっている人の方がなりやすいのです。クーラーに当たりすぎると、私の身体は汗を出さなくなり、汗をかくことで体温を下げるのですが、汗を出さなくても大丈夫と言う過保護状態が続くと、身体はクーラーが体温調整をやってくれるんだと勘違いします。すると身体は汗を出すことを忘れ、体温調節ができなくなり自ら熱中症という状況を作り出すのです。クーラーのなかった昔には熱中症はなかったのです。私たちが求める快適性は、それと引き替えに地球にも、自分にも副作用があることを知らねばなりません。原発も、AIも全て同じで、科学というものはそういう諸刃の刃だと知らなければなりません。さて、この先子ども達の時代、この地球はどうなっていくのでしょうか。私たちは次の世代にどのような地球を残していくのでしょうか。どうすれば今の状態を少しでも変えていけるのか。大きな課題です。この流れを止めることは出来ないかも知れませんが、どこかで私たちの過保護とも言える欲望の追求が餓鬼という地獄を造るのだ

と知る必要があります。それがお盆の伝える教えだと思えます。私たちに必要です。過保護は適応障害をつくります。子育ても身体も同じです。そして私たちが受け継いだ地球も、負なる遺産にして子

ども達に受け渡すようなことはしてはなりません。仏法の智慧、そして「少欲知足」の教えをもとに、私ができることを続け、地球環境の保全も考えて行きたいものです。

お念仏のしずく



「おんぶん自分について」

信心をうるについて、ことに大切なことは、つねに自分自身について、よくよく思量することです。ここでいう思量とは、親鸞聖人もよく用いられた言葉であって、自分の現実のありようについて、深く省察することを意味します。真宗の仏道とは、ただ口先ばかりで、称名念仏すればよいというものではありません。またただに師について、教えを聞けばよいということでもありません。それでは誰かが、からかっていったように、舌と耳だけが浄土に生まれることになりましょう。称名念仏を申すということも、またよき師に出遇って仏法を聞くということも、ともにそのことにおいて、い

よいよ深く自己を問い、沈思してゆかねばなりません。すなわち、この身体をおして、主体をかけてこそ、念仏申し、聞法をするということでもあります。そのような主体をかけた念仏において、その念仏が、やがて私から仏に向かう私自身の念仏であるとともに、それがそっくりそのまま、仏から私にとどく仏の念仏、仏の喚び声として、聞かれてくる念仏になってきます。私の念仏が仏の念仏、仏の念仏が私の念仏。称名が聞名、聞名が称名であるような念仏。そういう念仏です。そういう念仏、主体をかけた念仏こそ、まことの他力念仏といわれるものであります。

「この道をゆく」

安楽寺法要案内

九月	前坊寺七回忌 聴息忌	日時 9月16(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 仏教タイムス代表取締役 武蔵野大学名誉教授 東京 法善寺前住職 山崎 龍明 先生 講題 まことの信心
十月	顕真・永代経	日時 10月21日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 佐伯沖 徳正寺 護山 智孝 先生 講題 御仏事としての墓参り
十一月	報恩講	日時 11月19日(日) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 尾道 法光寺 季平 博昭 先生 講題 すなおなままの私であるために
十二月	成道会	日時 12月9(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 阿賀 宝徳寺 平原 弘史 先生 講題 往生

暑いのちの仏教語



「この暑いと、何をするのもおつくくうだ」などいいいます。(おつくくう)は(億劫)で、正しくはオツクウと読むのですが、いつからかそれがなまったもの

です。(劫)というのは、仏教で説かれる極めて長い時間のことです。高さが四〇里というのですから、エレベースよりも高い岩山があつてその頂上に百年に一度ずつ天人が降りてきて、柔らかい衣の袖で岩山の表面をなでることによって、

その岩山が擦り切れて消滅するまでの時間を(一劫)という(《大智度論》)にありまます。そのような譬でしか言い表せないほどの長い年月が一劫なのです。(億劫)はその一億倍なのです。から、もはや永遠というほかありません。そういう時間のことを考えると気が遠くなりそう、目の前の仕事など手につかない気分になります。そこでめんどくさくて、やる気が出ないことを、(おつくくう)というようになったわけです。